

# 難波西鶴と 海の道

【36】

森田 雅也

西鶴の若いころ、西  
回り航路ができるまで  
は、東北米、北陸米な  
どを大坂まで回米する  
には、敦賀あるいは小  
浜でおろし、いったん陸  
上輸送で琵琶湖まで運  
び、湖上輸送を経て、淀  
川を下っていきました。

先に一度は栄え、滅  
んだ敦賀の商人、前回  
はおそろしく衰えたであ  
ろう小浜の網糸屋の話  
を挙げましたが、とて  
も大成功した小浜商人

の話があります。

それは『好色一代男』  
〔天和2(1682)  
年刊〕巻三の「恋の  
すて銀」です。

世にすめば、袴・  
肩衣もむつかし。人  
の風情とて、朝毎に  
髪ゆはするも心に懸  
れば、十徳にさま替  
えて、昔は男山、今  
こそ桑阿弥と、八幡  
の柴の座とい、念所に  
たのしみを極め、東  
に三十万両の小判の  
内蔵を造らせ、西に  
銀の間、枕絵の襖

## 交通の要衝小浜の逸話

隙子、都よりうつくしきをあまた取りよせ、誰おそるもななく、ある時ははだか相撲、すずしの腰綱をまきせて、しめきはだへ黒き所までも見すかして、不礼講のありさまなるべし。この人もとは若狭の小浜の人なり。北国すぢの舟つきのたはれ女、敦賀の遊女、残らず見捨て、今上方に住みぬ。とあります。

書き出しは、世間の付き合いとほ面倒なもので、毎朝整髪するだけでも気を使うが、隠居姿(十徳)になれば楽だといふのです。

西鶴も34歳で髪をそり、隠居したようです。から、『好色一代男』

を出版した41歳のころは自由な身を謳歌していたと考えられます。実感でしょうね。

そんな隠居暮らしは桑阿弥だと、京都八幡の柴の座に住む桑隠居は、屋敷の東には30万両(約300億円)の金庫を作り、西の銀の間には枕絵を描いたふすまを入れ、京都から美女を集め、人目もはばからず、裸相撲などみだらな格好をさせて、自由奔放に遊んでいたといふのです。

この人の出身は若狭の小浜。北国筋(小浜・三国・寺泊・新湊など)の船着き場の遊女や、敦賀の遊女など遊び尽くして、こうして上方に住んでいるといふのです。

それにしても、30万両(約300億円)とはすごい金額ですね。一代でもうけたのでしようか。やはり、小浜が戦国期以来集積地として飛躍的に経済的発展を遂げた地であるために、裕福な商人を輩出してきたのでしょう。

勘当されて寄る辺もない21歳の世之介は、図らずもこの方の庇護にあずかり、物語は展開するのですが、歳立てで書かれている『好色一代男』からは、小浜全盛の1640年ころの話となります。

昔から交通の要衝はもうかるし、物語に名を残すものなのですね。

(関西学院大学文学部文学言語学科教授)

# 世之介庇護する裕福な商人